

< 海外情勢 >

好機到来! <連載第2回>

大転換時代の勝利者となれ! アジアが輝く時代がやってくる

台湾をめぐる米中の駆け引き

昨年の大晦日、トランプ大統領は新しい法律にサインした。

その法律の名は「アジア再保証推進法 (Asia Reassurance Initiative Act)」。「アジア諸国との安全保障や経済の協力強化」が謳われている法律だが、その内容は、台湾への防衛装備品の売却を推進すること、東シナ海や南シナ海への「航行の自由作戦」が主な柱である。明らかに台湾防衛を意識したものだ。「罰則を含む法律の執行を強化する」と宣言する米国に対し、中国の習近平国家主席は反発を露わにする。

年が明けた1月2日には「台湾問題への介入は中国への内政干渉であり、強烈な不満と断固たる反対を表明する」と米国を批判した。これまで極東の危険地域は朝鮮半島だと認識されていた。核やミサイル実験を繰り返す北朝鮮が問題であり、米国が半島に実力行使する可能性が語られることも多く、世界の目は朝鮮半島に釘づけになっていた。

ところが昨年6月のシンガポール米朝会談で北朝鮮危機はとりあえず沈静化し、今年2月のハノイ米朝会談が「物別れ」に終わったものの、米国が北朝鮮に武力行使する可能性はかなり弱まってきている。その代わりに、台湾情勢が怪しさを増している。

台湾の総統選は来年(2020年)1月に行われる。総統選は与党「民進党」と最大野党「国民党」の一騎打ちになることは間違いない。

民進党は昨年秋の統一地方選で惨敗し、総統選が立て直し選挙となる。その民進党では、候補者選びが難航している。現在の総統である蔡英文(62歳)は、4年前の総統選では圧倒的な人気で、台湾全体で70%もの高支持率を獲得して総裁になった。

ところがその後、中国側の経済締め付けも影響し、人気は下降。昨秋の統一地方選挙では「歴史的敗北」を喫し、蔡英文が責任をとって党首を辞任した。

蔡英文に替わって党首となったのが卓榮泰(60歳)だ。

卓榮泰執行部は民進党公認候補として今度の総裁選でも蔡英文を担ぎ上げる予定だったが、ここにきて前首相（行政院長）の頼清徳（らいせいとく 59歳）の人氣が強まり、蔡英文を押しつけて民進党総裁候補になる可能性も出てきている。

一方、最大野党国民党は鴻海（ホンハイ）の郭台銘（かくたいめい）が大統領選に立候補することを表明（4月17日）、政権奪還に強い意欲を示している。米国トランプ政権は蔡英文に期待を寄せ、全面バックアップの雰囲気を見せているが、国民党・郭台銘とは疎遠の関係にある。国民党の総裁が誕生すると、兩岸関係（大陸と台湾の関係）は緊密関係を模索し安定するが、民進党が勝つと兩岸関係は冷える。まして中国側が断固として拒否する蔡英文が再選されるとなると、台湾が危険な状況に陥る可能性もある。

なにしろ習近平政権内部からは、「蔡英文が再選されたら台湾に武力侵攻する」といった声も出ているほどなのだ。台湾と大陸の関係は、日本人には理解しにくい面がある。その「理解できない面」は「蒋介石と毛沢東の対立」に起因している。

蒋介石と毛沢東の関係を理解していないから、台湾と大陸の関係が理解できないといってもいいだろう。

蒋介石の国民党軍…毛沢東の共産党軍…両者は長い間、中国大陸で「国共内戦」を繰り返りひろげていた。そうしたなか、日本軍による大陸侵攻が始まると「国共合作（国民党と共産党の合体）」で一体となって日本に抵抗したが、大東亜戦争が終わると同時に、またも国民党と共産党に分かれて戦争を続けた。国民党と共産党、蒋介石と毛沢東。この2人が互いに尊敬しあっていた事実を、日本人は理解していない。

実はここに、アジアの未来を見通す大きな鍵が存在する。世界史上でも理解しにくいとされる「国民党と共産党の関係」こそ、アジアの未来・人類の未来に重要な意味を持つ。蒋介石と毛沢東、国民党軍と共産党軍の戦いについて、歴史の1ページを見直してみたい。

美廬別荘で蒋介石との思い出に浸った毛沢東

「日は香炉を照らし紫煙を生ず、遥かに看（み）る瀑布の長川に挂（か）くるを。

飛流直下三千尺、疑うらくはこれ銀河の九天より落つるか」と

（日照香炉生紫煙 遥看瀑布挂長川 飛流直下三千尺 疑是銀河落九天）

高校時代に漢詩を学んだ方なら、この詩に触れたことがあるかもしれない。これは「詩仙」と称された李白の『望廬山瀑布（ぼうろざんぱくふ）』という詩である。中国の景勝地として名高い廬山（ろざん）の景色を詠ったものだ。

廬山は、世界遺産にも登録されている絶景の土地である。険しくそそり立つ山や絶壁が生み出す景色は素晴らしいものだという。19世紀に中国（清）が弱体化していくなか、欧州を中心に列強たちが中国各地の土地を買いあさったが、廬山も当然のように外国人の別荘地になっていった。英国を初め、米国・ドイツ・フランス・ロシア・イタリアなど20を超える国々の金持ちたちが、さまざまな様式の豪華別荘を建てまくったのである。それらのうち500棟ほどの別荘が現存している。そうしたなかで、ひととき威厳にあふれ歴史的にも深い意味を持つ建物が「美廬（びろ）別荘」である。

美廬別荘が建てられたのは1903年。建て主は英国人の金持ちだった。彼はこの別荘を英国人女性に手渡し、その英国人女性が**宋美齡**にプレゼントしたという。

宋美齡とは中国の超大金持ちだった宋家三姉妹の末妹で、蒋介石夫人である。ちなみに長女・**宋靄齡**（そうあいいい）は大財閥・**孔祥熙**（こうしょうき）夫人、次女・**宗慶齡**は孫文夫人。蒋介石は、この別荘を愛用していた。1937年（昭和12年）7月、廬溝橋事件から10日後に「日本軍の動向によっては徹底抗戦に転じる」という主旨の蒋介石『最後の関頭演説』は、この美廬別荘で発せられた号令である。

蒋介石『最後の関頭演説』から12年後の1949年10月1日、毛沢東は北京の天安門に立ち、中華人民共和国の建国宣言を行った。その時点ではなお蒋介石・国民党軍は重慶で健在であり、福建省・広東省など中国全土の3分の1以上の地域は国民党軍が支配していた。しかし、その年の11月末には重慶が陥落し、蒋介石は台湾に逃げ延びる。

その直後、毛沢東は美廬別荘を訪れ蒋介石の個室にこもり、蒋介石愛用の椅子に座って長時間本を読んだと伝えられる。毛沢東にとって6歳年上の蒋介石は、最大の敵であり…友朋であり…畏敬すべき先輩だった。毛沢東は蒋介石を憎み、敬愛していた。

蒋介石と毛沢東、国民党と共産党。この関係は一般常識とは別の側面を持っている。表向きの関係はもちろん重要なのだが、**隠された側面**もまた重要である。

その「隠された側面」を理解するために1936年（昭和11年）12月に起きた「西安事件」を再検証してみたい。

「西安事件」とはどんな事件なのか

1936年当時、国民党軍と共産党軍は激戦を繰り返していたが、清王朝が滅んだのちの中国は単純な状況ではなかった。国民党軍とも共産党軍とも結ばない軍閥・**楊虎城**（ようこじょう）や、蒋介石配下でありながら楊虎城と親しく、共産党軍との接触を図る**張学良**（張作霖の子）などが西安事件に関係している。

西安事件が起きる直前の1936年秋には、蒋介石・国民党軍は共産党軍を次々と撃破し、あとわずかで共産党軍壊滅まで追いつめていた。共産党軍は当初、1927年夏に「**工農紅軍**」として創設された。この共産党軍は、創設から9年後の1936年初めには21万人の兵を擁する大軍団に成長した。

ところがその後の国民党軍による「**剿共（そうきょう＝共産党全滅）作戦**」により、兵力は3分の1以下、7万人足らずになり総崩れ。もはや壊滅は必然の状況となっていた。蒋介石は全軍に総攻撃を命じるが、中立を掲げる楊虎城が動かず張学良も総攻撃を開始しない。しびれを切らした蒋介石は、共産党軍完全掃討を目指して自ら前線に乗り込み、陣頭指揮をとることを計画する。その直前の12月12日早朝、楊虎城の軍が蒋介石政府・国民党軍・保安部隊・飛行場などを襲撃。120名の決死隊が蒋介石の滞在する華清宮（かせいきゅう）を急襲して銃撃戦となり、双方37名の死者を出し、裏山に逃げ込んだ蒋介石が捕縛・拉致され、西安に連行されたのだ。

連行先で蒋介石は、張学良などから「**内戦停止**」を突きつけられた。もう少しで共産党軍が完全に消滅するところである。蒋介石はこれを断った。がそこに周恩来が現れ、さらには妻の宋美齡も上海から飛んできて説得され、ついに蒋介石も妥協。これが、翌1937年の盧溝橋事件から始まった日中戦争で「**第二次国共合作**」を成立させたと説明される。ちなみに周恩来はかつての蒋介石の部下で、互いに気心を熟知していたことは確かだ。つまり大雑把に纏めれば、蒋介石が拉致され…脅され…国民党軍と共産党軍が手を結ぶことになった事件が「**西安事件**」だと解説されている。

これが表の解説である。この解説は大幅に間違っているわけではない。だがこの事件の背後には、隠された一面があるのだ。その隠された一面こそ、世界史の闇であり、アジアの未来に大きな意味を持つのである。

国共合作のほんとうの狙い

西安事件は蒋介石による自作自演の茶番劇だったという説がある。

そんなバカな話はない。現実にはたくさんの兵士が死に、蒋介石自身も生命の危機に瀕したはずだと反論されるだろうが、この「**茶番劇説**」を裏付ける証言もある。西安事件の真相に迫るためには、当時の国際情勢を理解する必要がある。

日清戦争（明治28年／1895年）とその後の三国干渉、さらに**日露戦争**（明治38年／1905年）により、ちっぽけな島国・日本が大陸に侵出しはじめた。日本の侵出は欧米列強やロシアにとって脅威だった。この認識が重要である。欧米を初めとする世界が日本を

「脅威の存在」と感じた理由は、日本の武力にあったのではない。日本人が根底に持つ「考え方」が怖かったのだ。日本人の「哲学」とか「物の見方」は欧米世界のものとは異なり、中国を初めとするアジア人と同じ感性なのだ。日本の侵出によりアジア人本来の感性が目覚めることが脅威だったのだ。だから、何としても日本の大陸侵出を止めなければならない。欧米やロシアは暗黙のうちにそれを了解し、蒋介石の軍を背後から支援しようという動きとなって表面化していた。それが「援蔣ルート」である。

援蔣ルートとは「蒋介石援護ルート」のことである。

一般に「援蔣ルート」というと、ビルマ（ミャンマー）やインドから英米軍が支援したルートを指すが、初期にはこれ以外にも「香港ルート」（英領香港から支援するルート）、「仏印ルート」（仏領インドシナ。ベトナムのハイフォンを起点）、「ソ連ルート」などが存在した。1941年締結の「日ソ中立条約」によりソ連ルートは停止され、「仏印ルート」も日本軍のインドシナ進駐（1940年～1941年）で幕を閉じた。

援蔣ルートの一部は閉鎖されたが、英米による蒋介石支援は益々ふくれ上がっていった。蒋介石・国民党軍は英国、米国から豊富な武器弾薬を渡され、それにより強力な軍隊となり、毛沢東・共産党軍をつぎつぎと撃破していった。このまま蒋介石軍が共産党軍を壊滅すれば、全中国は蒋介石軍が掌握する。だがそれは、「蒋介石・中国」の誕生ではない。「英米の下僕の蒋介石が中国に君臨する」ことになり、中国は英米に隷属する奴隷国家になり下がる。蒋介石は、それを嫌ったのだ。

1936年10月、蒋介石軍と戦って敗北を重ねる共産党軍は、もはや風前の灯火状態に陥っていた。英米から背後支援を受ける蒋介石は、まもなく全土を完全掌握する者となる状況だった。そんなときに蒋介石が拉致され、周恩来と話し合う場がつけられ中国の状況は激変する。そんな折り、日本軍が盧溝橋事件を起こし、泥沼の日中戦争が開始される。「西安事件」とは、表で語られている解説とは多少異なる側面を持っている。

その隠された側面が、ぼんやりと見えてきたのではないだろうか。

台湾と大陸は「1つの中国」になるのか

「西安事件」の隠された側面はこれ以上深く探ることはできない。だが蒋介石・国民党軍が英米の下僕となることを意図的に避けた状況証拠は、その後の歴史からもうかがい知ることができる。大東亜戦争が終わり、日本が大陸から撤退したのち、国民党軍と共産党軍は中国各地で激戦を繰り返した。その激戦で、数百万人が命を落としている。いや数百万人どころか一千万人を越え、3,000万人～3,500万人の戦死者が出たという

推測もある。この激戦のなか、国民党軍は終始、米国から武器弾薬の支援を受け、最新の兵器を提供されていた。共産党軍はその最新鋭兵器を強奪することにより少しずつ兵力を高め、やがて形勢を逆転させ国民党軍を大陸から追い出すことに成功した。戦場ではいつも、国民党軍の武器兵器は共産党軍に奪われていった。米国が提供した武器弾薬が、結果的には共産党軍を支援するものになっていった。

それこそが蒋介石の狙いだったと考えれば、実にわかりやすい話ではないだろうか。

時代はずっと下がり、1978年に中国の頂点に立った鄧小平が、台湾の蔣経国（蒋介石の息子）総統に統一を持ちかけたという話がある。

そのとき蔣経国は「統一にはなお30年は必要だ」と応じて鄧小平の提案を断ったとされるが、鄧小平のこの提案の背後にも、「蒋介石・毛沢東密約」の存在が感じられる。鄧小平は1904年に、四川省の裕福な客家地主の子として生まれている。

16歳になった鄧小平は共産主義学習の一環である「勤工儉学」としてフランスに渡った。フランスでは客家人脈を使ってロスチャイルド家（エドアール・ド・ロチルド男爵）と親しくなり、その力でルノーに勤務。その翌年にフランスで共産主義者追放運動が起きたが、鄧小平はロスチャイルド家の力を借りてモスクワに飛んでいる。そのモスクワで、鄧小平は「モスクワ中山大学」で学ぶことになる。

モスクワ中山大学は、スターリンと孫文（孫中山）の合意でつくられた全寮制の大学である。この学生寮で鄧小平と同室だったのが、6歳年下の蔣経国だった。鄧小平と蔣経国は「無二の親友」だったという。

鄧小平が蔣経国に統一を呼びかけ、蔣経国が断ったという物語から台湾で国民党が勝利すれば、いつの日か中国統一（台湾併合）が成立するという考え方は十分成立する。しかし一方では、そう単純なものではないとする見方もある。

統一よりも中国本体が北京派と上海派に分裂するほうが先で、2つに割れた中国の片方と台湾が合体するなどという予測も存在する。中国の政治状況は理解しにくく、いろいろな予測が成り立つことは当然でもある。記憶しておくべきは、20世紀前半の国共内戦のとき、蒋介石は英米の下僕になることを避けながら英米から支援を受け続けていたという事実である。この物語の原点に孫文（孫中山）の壮大な計画が存在する。

—以下次号—